
ノエルタリア外伝/スリーピングスネーク

七瀬なな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノエルタリア外伝ノスリーピングスネーク

【Nコード】

N9840I

【作者名】

七瀬なな

【あらすじ】

完結済小説『マリッサ・ノエル、エレ・ノエル』の外伝です。

本編を読まなくても独立した話として、一応スジは通りますので、ご安心を。

でも、ついではなんてですが、本編のほうも読んでいただけると、嬉しいな。

ノエルタリア。

彼女は夢を見ている。

棕櫚の葉が揺らめき、白壁の家々が連なる一大オアシス、ナハシヤ国、都の中心にそびえる黄金宮殿の地下、奥深く。

鉄格子に囲まれた黴臭い小部屋で、鉄の鎖につながれて。

南側の壁だけに、横に細長く伸びた小窓が設けられている。

天井近くを横に這う鉄柵つきのこの窓から忍び込んでくる銀色の月光……今、この部屋を照らし出す唯一の光源。

床に散らばるノエルタリアの白い巻き毛のひとふさ、その巻き毛がからまった足首、大理石でできているかのような冷たい質感を漂わせる、その肌の上できらめくルビーとサファイアのアンクレット。冴えざえとした月の光の帯が直接映し出しているのは、これだけだった。

「……………」

夢うつつのまま、ノエルタリアは不意に身じろいだ。

アンクレットは月光のスポットライトから退き、かわりに五つの桜貝を嵌め込んだような爪をもつ、足指が現れた。

暗闇の中で、彼女は眉をひそめていた。

銀色の長いまつげは、あまりにきつく閉ざされすぎたまぶたのため、優美な弓なりの曲線をゆがめられていた。

かすかに震えてさえた。

……助けて。

全身が痛い。苦しい。息ができない。

ああ、だれか。

わたしを救って。助けて。痛くて苦しくて、たまらないの。

だれになにを訴えても、どうにもなりはしないと経験で思い知っていたながら、それでもなお、何者かに救いを求めずにはいられなかった。

だれか……たとえそれが何者であろうと、かまわない。

この思い殻を取り去って。因果な転生を終わらせて。

だれか、脱皮を手伝って！

夢の中で、彼女は一匹の白蛇と化していた。

木々の葉の形、土の匂い、一切見知らぬ異郷の地で、転生の苦痛に喘いでいた。

窮屈な旧皮の下、生まれたてのひ弱な鱗が身じろぎするたび悲鳴をあげる。

そのくせ、ひ弱なくせに、この新しい身体は一刻も早く、古い戒めから解放されたいがために、闇雲にじたばたするのを、やめよう
としない。

彼女は大声で叫びたかった。

けれど声帯を持ち合わせていなかった。

彼女は顔を歪めたかった。

けれど彼女の顔面の筋肉は、苦悩を表現できるほどの柔軟さに恵まれてはいなかった。

血の色をした二又の舌が、ただちろちろと見え隠れするばかり。

苛立ちまぎれに胸を持ち上げ、地に叩きつける。

旧皮とともに、まだ薄くて頼りない新皮も小石に傷つけられる。

尾が跳ね上がる。

そこは水辺だった。

尾の先端が水面を打ち、空中にビーズを踊らせ、澄んだ音を響かせて小さな波紋をいくつか投げかけた。

……がさり、と、落ち葉を踏みしめる音。

蛇である彼女にとっては、天をも揺るがす災害の先触れかとも思えた。

本能的に、そちらに目をやる。

人間の少年が、彼女の頭上に屈み込もうとしていた。

「怖がらないで。君の手助けをしたいんだ」

絶望に囚われ、もはや身動きひとつ叶わなくなったノエルタリアに、少年はこうささやきかけた。

ノエルタリアには、少年の言葉は理解できなかった。

蛇の身であつたためか、それとも異国人であるがゆえなのか。

「そっちへ行くよ。行くからね」

だが、敵意を持っていないことだけは感じられた。

奇妙なほどのいたわりが、あたたかい指先から流れ込んでくる。

そのぬくもりは、彼女のひ弱な新皮に力を与えた。

ノエルタリアは、今度は慎重に、胴をくねらせてみた。

少年の手は、はがれかけた旧皮の上に置かれた。

これまでの苦勞が嘘のように、楽に抜けることができた。

ノエルタリアは安堵のため息をついたつもりだった。

実際には、舌先がひるがえっただけだ。

こうして、脱皮は完了した。

ひと心地つくつと、俄かに少年の視線が気になってきた。

少年は、まだ彼女を見つめていた。

少年の瞳は、誇らしげに輝いていた。

やさしく、あたたかく、親しみのこもった、いたわりに満ちた、まなざし。

ノエルタリアは、落ち着かない気分になった。

こんな目でひとに見られたことがなかったからだ。

なんだか、恥ずかしくなってきた。

まるで本来の、人間の姿で全裸をさらしているかのように。

少年の目から逃れたかった。身を隠してしまいたかった。

だから水の中に入った。

水は冷たく、心地よかった。

快い浮遊感に身を委ね、このまま泡になってしまうのもいいと思った……。

ノエルタリアは目を覚ました。

爪先が月光に照らされ、桜貝のような爪がきらめいているのを認めた。

「ダンテ……」

視線を爪先から、彼女がすっかり身をまかせて寄りかかっている巨大な、不気味な物体へと移し、低い声で呼びかけてみる。

それは、地鳴りのような呻き声で応えた。

それは、ダンテと呼ばれていた。

そう呼んでいたのは、彼女だけだった。

たまに、その姿を霊視できる者もいた。

彼らは口を揃えて、それを「怪物」と言い切った。

それをダンテと呼ぶのは、ノエルタリアだけだった。

「ダンテ、夢を見ていたよ……」

ぼんやりとした頭の思いつくまま、とりとめのない言葉をつぶやく。

「わたしは蛇になっていた。白い蛇さ。脱皮するのを手伝ってもらった。手伝ってもらったのに、逃げてきてしまったよ……あの子……」

……」

彼女はまた、うつとりと目を閉じた。

自分でなにを言っているか、わかっていなかった。

ダンテがグルグルと呻く声が子守歌の役を果たし、眠気を促す。

「あの子……森の王子……」

少年が触れてくれた肩のあたりに、そのときの感触を思い出しな

がら、ダンテの地鳴りにくるまれて、ノエルトリアは次の眠りの世界に、堕ちた。

イーダス・レムノスク。

一体どんな方なのかしら。

アリシア・カノーラは不安な胸に両手を組み合わせ、金色のまつげを伏せて青ビロード張りのソファに腰掛けていた。

彼女の養父バロツサ・カノーラは、権力に恋をしていた。

バロツサだけではない。

バロツサの父も、祖父も、カノーラ家の当主たちは権力を手中におさめるため、それに一步でも近づくため、持てるすべての知恵、策謀、手段を駆使し全霊を捧げてきたのだった。

貧村の農奴出身であったバロツサの祖父は、怪しげな魔術師に弟子となり、薬の知識を身につけた。

その秘伝をかき集め、独占するためには道理を無視し、あらゆる手を尽くした。

どんな非道も、躊躇しなかった。

祖父はみずからの骨の骨、肉の肉たる分身……息子にしか、おのれの本質を明かさなかった。

やがて祖父は力尽き、その息子、バロツサの父が遺志を継いだ。父は祖父より吸収した知識に加え、社交術にも長けていたので、周囲の引き立てを得、貴族に取り入ることに成功し、男爵の称号を手に入れた。

そして彼、バロツサの誕生。

カノーラ家の夢が現実になる。

三代に渡る権力への恋慕が成就する瞬間が、近づく。

今朝、やわらかな陽光を受けて佇む、養女アリシアの美しい成長ぶりに目を細め、バロツサは大いなる満足感に浸った。

腰まで真っ直ぐに垂れかかる淡い金の髪に、薄紫の瞳。

瞳は光の加減で青にも見える……妃候補の条件は、どうにか満たしている。

妃候補の毛色を持つ娘は、あまり多くは生まれない。

バロツサは人手と金に糸目をつけず、金髪碧眼の幼女を探し回った。

そして、アリシアを見つけた。

彼女は一袋の金貨と引き換えに、バロツサの手に売り渡されたのだった。

薄紫の瞳……完璧な青ではないことが唯一の欠点だが、それを補ってあまりあるほどの知性と、転生の美貌に磨きをかける術を、バロツサは彼女に叩き込んだ。

第二王子の妃候補とはいえ、王家の一員と娶わせる機会を得たのであれば、望外の快挙と言わねばなるまい。

「行っておいで、アリシア。なんにも心配することはない。妃候補たるに相応しい教養はすべて、その身に施してあるのだからね」

「はい、お父さま」

アリシアは身をかがめ、養父の右手中指で無機質な光を放つ、小鳥の卵ほどもある、大粒の翡翠に接吻をした。

幼い頃から畏怖し、服従し続けた養父の宝石。

慈愛の衣をまとった圧力の象徴。

彼女はそれに最後の礼拝をして、迎えの馬車に乗ったのだった。

イーダス・レムノスク。

アリシアの意思に関わりなく、彼女の夫と定められた、この国の第二王子。

『どのようなお方かしら』

彼女は甘い幻想など抱いてはいなかった。

養父とも、養父の翡翠とも別れを告げあ後でも、アリシアは解放感を味わうことはなかった。

翡翠の鎖から解放されても、また別の鎖が待ち構えているだけなのだ。

教養、と養父は言った。

妃となるための教養を施した、と。

実際アリシアに課せられたのは、そのような前向きなものではなかった。

それは、矯正だった。

拒否することの許されぬ絶対的な、矯正。

彼女の意思や感情は、容赦なく凍結させられた。

心の中が空なのだから、物覚えは素晴らしく早かった。

あらかじめ細工されたとおりに動くからくり人形と、大差なかった。

イーダス・レムノスク。

物心つく前から、彼女はその名を聞かされていた。

直接彼女に話した者はいないが、イーダス王子が王家にあるまじき容貌に生まれついているという事実も、彼女は噂話を漏れ聞いて

知っていた。

そとと、漏れ聞いた噂は、もうひとつ。

まるで森のオオカミのようなお方だ、という。

未来の夫に関する情報は、これだけだった。

森のオオカミ。

アリシアは、その獣が現実生きて動いているさまを、まのあたりにしたことがない。

ただ、養父バロツサの書斎には、彼がみずから狩で射止めたという、灰色オオカミの毛皮が床に敷かれていた。

琥珀の目玉をかつと見開き、鋭い牙と赤い舌を大きく裂けた口から覗かせたその形相はすさまじかったけれど、アリシアの胸には、恐ろしさとは別の想いが去来した。

それは……哀れみと羨望。ふたつの相反する想念。

『おれは何故こんなところにいるのだ？』

『何故こんな場所に転がって、惨めな姿をさらしてはならないのだ？』

毛皮のみの、そのオオカミは、そんな問いを絶えず繰り返しているかのようだった。

とうの昔に生命を奪われてもなお、その身に漂う哲学的なまでの存在感。

生きながら個性を葬られ、機械仕掛けのからくり人形であれと強制される自分と、なんという対照か。

養父の足元に力なく横たわるオオカミの毛皮。

養父の指輪に絶対服従を誓う自分。

同じような境遇にある者に寄せる憐れみの情と、似た立場に置か

れながら決定的に異なる点……アリシアは生きながら自我を否定され、オオカミは死してなお、自己主張を止めはしない……この点において、彼女は羨望を禁じえなかったのだ。

アリシアの知るオオカミとは、このようなものであった。

イーダスが森のオオカミのようという噂を聞いて以来、アリシアの心の内では、まだ見ぬ王子と養父の書斎の敷物のオオカミが、しばしば重なってくるのだった。

「困ります、殿下！」

にわかに扉の外が騒がしくなってきた。

不穏な空気の中に、侍従のこの言葉だけがはっきりとアリシアの耳に届いた。

彼女は立ち上がって身を固くした。

組み合わせた両手には発汗を感じた。

乱暴に扉が押し開かれた。

白い緞子に金銀の刺繍を贅沢にちりばめた上着のすそを、優雅にひるがえしながら部屋に押し入ってきたのは、肩をかすめる程度の長さにまっすぐ伸びた金髪と、刺すような鋭い光を宿す、淡い水色の瞳を持った長身の少年。

豹。

アリシアがもしも、この南国の猛獣の存在を知っていたなら、彼を一目見るなり連想したにちがいない。

空気を切り裂くような身のこなし、金色の毛並、人を射すくめる眼差し、生まれつきの王者の威厳。

「あいつにはもったいないような美少女だ」

アリシアを遠慮のない視線で値踏みした後、彼は、さも楽しげなくすくす笑いをもらした。

「もつとも、わたしとあいつとでは、だいぶ好みが違っているからね。きみの容姿はあいつには気に入らないかもしれませんが……ご存知ですか、きみ」

彼はふたたび真顔に戻る。

まさに豹変。

そして、ずい、と近づいてくる。

アリシアは我知らず、後ずさった。

たちまち壁に追いつめられる。

「あいつは大嫌いなのですよ。わたしやきみのような、うすい色の髪と瞳の持ち主がね。まったく、馬鹿げている……わたしはね、き

み、あいつの外見のことであいつを蔑んだ覚えは一度もないのだ。
いいですか、一度もですよ！

それだのにあいつは、金髪碧眼というだけでわたしを毛嫌いしている。この外見のせいで、あいつはわたしが嫌いなのですよ。愚かだとは思いませんか。あいつがあいつ自身の責任であんなふうになれついたのでないのと同じ理屈で、わたしだってなにも、好きで王族の典型として生を受けたわけではない。

こだわっているのは、あいつのほうなのですよ。周囲の偏見を拒もうとしながら結局それに吞まれ、同調して、あいつはあいつ自身を縛りつけているのですよ！」

「な、何故そのようなお話を、わたくしに？」

やっとの思いで、アリシアは口を挟んだ。

彼女は目をつぶり、両手で頭を庇うようにかざし、震える声で問いかけた。

「……あれ？」

王子は拍子抜けしたような声を出した。

アリシアはその声に誘われるように、顔を上げた。

「アリシア・カノーラ嬢ではないのですか、きみは」

「たしかに、わたくしはアリシア・カノーラでございますが……」

「だったら、そんな的外れな質問をするものではありませんよ、カノーラ嬢。もしかして、わたしが何者かご存じない？」

「まさか、あなたを存じ上げないなどは……レムノン王家第一王子、スーブラックさま」

アリシアは腰を軽くかがめ、遅ればせながらの挨拶をした。

「それならば、わかるはずだね。先刻からわたしの話している『あいつ』というのが、誰のことか……そう、きみの夫になるかもしれ

ぬ男のことですよ、カノーラ嬢。そしてわたしは、きみの夫となるかもしれぬ男の兄だ。ここまではよろしいか？」

アリシアは当惑しつつ、頷いた。

「さきほどの話の内容を、おぼえている？」

今度は慎重に、頷く。

「……いつか伝えてもらいたいですよ、あいつに」

第一王子はおもむろに、アリシアに背を向けて、つぶやいた。

「わたしは、あいつを憎んでも嫌ってもいい。外見の違いにこだわらず、ただ、まともにぶつかってきて欲しいだけなのだ……」

この方は。

これだけのことを言うために、あんなに強引に押し入ってきたのかしら。

驚くやら、呆れるやら。

気が緩み、アリシアは王子の背中に、微笑みかけた。

「わたしの意固地な性格でね」

スーブラック王子は、さっと顔をあげて向き直り、持ち前の強い眼光でもってアリシアを正視した。

アリシアの微笑は、消えた。

獣じみた王者の瞳は、本人が無意識のうちにも、視線を注がれた者に、ある種の威圧感を抱かせずにはおかない。

かまわず、王子は続ける。

「それほど寛容な性質でもないし、敵意まるだしで毛を逆立てられると、どうしてもこちらも、ついムツとして、想いとはうらはらな言動に走ってしまう……血が近いせいだろうか、仲たがいにも年季が入っていてね、やさしい女性の仲介にすがろうという次第です」

スーブラック・レムノスク。

冷徹な印象をさえ与える、氷のような瞳、皮肉っぽい物言いの影に、少年らしい感性を隠し持つ……金色の毛皮に豪華な斑紋を散りばめた、高貴な獣。

「ああ、そんなに買い被ってはいけない、カノーラ嬢」

王族は直観力に優れている。

スーブラックとて、もちろん例外ではない。

彼は子供っぽいほどのプライドの持ち主でもあった。

アリシアが彼に対して、そこはかたない好意を抱いたことを鋭く察知し、そして、謂れのないきまり悪さを覚えたのだ。

第一王子は妙に芝居がかった大袈裟な身振りで、言い放ち、そして、窓の向こうを横目でちらりと伺った。

けれどアリシアは、彼の目配せに対し、なんの意味も汲み取ることができなかった。

「わたしは意固地であまり寛容にできていない上に、相当な天邪鬼でもあるのだ。そんなに無邪気な任せ切った顔をされると、意地悪をしたくなってしまうのだよ。」

きみはわたしを誤解している。それはしあわせな誤解だ。ではわたしも、きみに対してしあわせな誤解をしても良いかな？ きみはわたしに好意を持った、そうだね？」

怜悯な薄青の瞳に、獲物をいたぶる猛獣の残忍さが宿った。

アリシアの心臓は、えもいわれぬ恐怖に高鳴り始めた。

「あいつの妃候補など辞めて、わたしのほうに乗り換えはないか？ そうだ、いつそそのほうが、君のお父上もきつと、お喜びになるに違いない！」

言うが早い。第一王子は、アリシアの右手首を掴んで引き寄せた。アリシアは悲鳴をあげた。

相手の豹変ぶりに、ただただ仰天し、捕らえられた魚のように王子の腕の中でけなげにもがく他、術がなかった。

突然、王子の暴力的な行為がピタリと止んだ。

おそろおそろ王子を見上げたアリシアは、彼がいたずらっ子めいた微笑を浮かべているのを認めた。

彼の冴えた水色の瞳は、アリシアを見てはいなかった。

彼は横目で背後を見つめていた。

彼の肩を掴んでいる、手の主を。

「……彼女はぼくの妃候補ですぞ、兄上」

声変わりを終えたばかりの、かすれた低い声。

オオカミのうなり声にも似た迫力を漂わせて。

「とんだ道化を演じてしまったようだな」

落ち着き払って、スーブラックは答える。

キン、と張り詰めた空気が二人の王子の間に生じた。

第一王子には、まだ若干の余裕があった。

先手を仕掛けた者の余裕だった。

彼は窓の外、大樹の枝葉の間からこちらの様子を覗き見ている弟の気配に気づくと同時に、弟をこちらに飛び込んで来させる計略を思いつき、まんまと成功をおさめたという訳だ。

ここで初めて、アリシアは先程、第一王子が窓際に目を走らせた理由に思い当たった。

「まあ、スーブラックさま、なんということを。」

あなたは、弟ぎみが止めに入るのを計算した上で、わたくしにあ

のような乱暴を働いたのですか？

弟ぎみがこの場に介入してくるよう、仕向けるためだけに？」

王家の兄弟の仲のこじれよつの凄まじさを、アリシアは痛感させられた。

「よろしい、悪者は退散するでしょう。正義の味方に叩き出される前にね……ああ、カノーラ嬢」

扉に手をかけ、第一王子は振り向いた。

皮肉な笑みが、片頬に浮かぶ。

「この続きは、いずれまた」

片目をつぶって見せ、身をひるがえす。

上着の裾が残像を描いた。

しなやかな豹の尾そのものように。

アリシアは血がのぼった頬に両手をあてて、扉から目を逸らした。逸らした先に、もう一人の王子の姿があった。

……同じ血を受けた兄弟とは思えない。

日に焼けた浅黒い肌。

背は、それほど高くない。

目線がアリシアと、ほとんど変わらない。

額や耳元や襟足にまわりつく、縮れた赤い髪。

深い深い暗緑色の瞳……眼光の鋭さ自体は兄に劣らないが、第一王子と彼との決定的な内面の相違を、如実に表していた。

洗練された物腰や辛辣なユーモアなど、人を惹きつける術を呼吸すると同じくらい自然に操る第一王子とは正反対に、今アリシアの前に立つこの王子には、装飾的な華やかさは微塵もなく、無骨な鎧をまとったような硬質な空気をその身の内から醸し出していた。

アリシアには、容易に想像がついた。

二人のこの差は、生まれ持った特質もさることながら、育った環境の違いこそが、より大きな原因であろうと。

きらびやかな宮殿で、当然のように人々に傳かれ、身に余るほどの愛情を注がれて、のびやかに成長した第一王子スーブラック。

逆境の中、様々な圧力を常に耐えていなくてはならなかった第二王子イーダス。

与えられる限りの恩寵を、一身に受けた兄。

余計なものはすべて、そぎ落とされた弟。

対照的な二人。

そのどちらにも、アリシアは同等の魅力を感じた。

……おふたりの力になりたい。

反発しあうお二人の、架け橋になってさしあげたい。

殊に、孤独なイーダスに、アリシアは同情心をそそられた。

かつて、養父の書斎に横たわるオオカミの毛皮に抱いたと同じ憐れみが、彼女の胸に湧き上がってくる。

淋しいオオカミのような方。

スーブラックさまの乱暴をとどめる為、窓を乗り越えていらしてください。

淋しい、優しい、手負いの獣のような方。

アリシアは、ぎこちない笑みを浮かべた。

そして、さきほどの礼を述べようと口を開きかけた、すると。

「きみを助けようと思ってしたことじゃない、誤解するな」

赤毛の王子はこういい捨てると、先刻彼が侵入してきた窓辺に足早に近づいていった。

アリシアは勇気を奮い起こして、その背中に叫ぶ。

「あなたのお気持がどうであれ、わたくしが救われたという事実に変わりはございませんもの。どうかわたくしに自己紹介をさせてくださいませ、イーダス・レムノスク王子さま」

「自己紹介なんか、無意味さ」

イーダスは、にべもなく言い切った。

お情け程度に振り返り、付け加える。

「どうせきみも尼僧院入り希望者なんだろう。異端の王子の妃にな

るよりは、一生を神に捧げて暮らしたい清らかな魂の持ち主なのだろうさ。案ずるには及ばない、こちらからきっぱりお断りしてさしあげるよ」

「いいえ、イーダス王子さま！」

アリシアはその場に跪いて懇願した。

「どうか、お願いです、後生ですからどうか、そんなことはなさらないで！」

アリシアの剣幕に、第二王子は目を剥いた。

次に口をついた言葉には、彼女自身も、たじろいだ。

「あなたに退けられるならば、この場で死を選びます！」

「なにを……言ってる」

困惑を満面に表して、立ち尽くすイーダス。

「わたくしは本気です！ 本当に死にます！」

感情が高ぶりすぎて、熱い涙が溢れてきた。

ふたつの紫水晶の瞳からこぼれ落ちる、透明水晶の雫。羞恥と混乱の作用で紅潮した頬の表面を幾筋も伝って、床にはじける。

「……どうかしてるんじゃないのか」

努めて抑制をきかせた声音で、イーダスはずぶやいた。けれど動揺は隠し切れず、語尾が震えた。

「泣くな、みつともない！」

第二王子は声を荒げた。

アリシアは黙り込み、うつむいて泣きじゃくる。

「……拭けよ、ほら、早く」

仕方なくイーダスは、つかつかと彼女に歩み寄り、自分の首に巻いてあった白いタイを、ぶつきらばうなセリフとともに彼女の右手に握らせた。

涙の洪水に見舞われた、少し下ぶくれ気味の丸顔が王子を見上げた。

たちまち王子はそっぽを向いて、その場を離れた。

窓枠に手をかけ、振り向かずにこう言った。

洪々、という感じで。

「……わかったよ。そんなに言うなら、返事はもう少し待ってやる。頭を冷やして、自分が今言ったことをもう一度、よく考えてみるのだな。気が変わって後悔するようになるまで、しばらく宮殿見学でもしてるといい。どうせそれほど長くはかからないだろうから」

言い終えるなりイーダスは、窓枠を蹴って手近の枝に飛びついた。アリシアは座り込んだまま、白いタイに顔をうずめた。

翌日。

「叱られますよ、カノーラ嬢」

「森に行かれるなど、とんでもなくことです、姫！」

「さあさあ、冗談はそれ位になさって、ご一緒にマリ遊びをいたしませんこと？」

誰に相談しても、無駄だった。

誰も本気で、アリシアの決心を取り合ってはくれず、誰一人、森への供を申し出てはくれなかった。

そこで彼女は口をつぐみ、一人で計画を練り、それを実行に移した。

午後のお茶の時間の後に設けられている昼寝の時刻、彼女は寝室を抜け出し、厩に忍び込んだ。

「しっ、いい子ね、静かにしていてね」

一頭の栗毛の牝馬を外に連れ出し、慣れない手つきで鞍をつけ、ハミをつけ、馬の背によじ登って、手綱を握りしめた。

騎士や従者の助けなしに、鞍つけからなにから装備をし、自力で馬に乗ったのはこれが初めてだった。

そもそもアリシアは、活発な性質ではなく、乗馬も一応は仕込まれたものの、それほど好きでも得意でもなかった。

養父もさほど熱心には勧めなかった。

女戦士を育てているわけでもなし、と苦笑いをしつつ、もたつくアリシアを目を細めて眺めていた。

それなのに。

自分に、こんな大胆な真似ができるなんて。

アリシアの頬は、ひとりでに緩んだ。

浮き立つような気分の高揚を覚えながら、手綱をどうにか操り、一世一代の冒険に向かって前進を始めた。

あたたかい午後の陽射し、やわらかな風、虫たちの羽音、鳥たちのさえずり、あたりに色濃く立ち込めた緑の匂い。

アリシアは、五感でそれらを味わった。

森は自分を歓迎してくれている……彼女はそうに受け取った。が、それは錯覚にすぎなかった。

森の奥に一步一步、馬のひづめを踏み入れさせることに、アリシアは当初のわくわくした心地を維持できなくなってきた。

高揚感が徐々に、そがれてくる。

一枚一枚、衣服を剥ぎ取られてゆくような、なんともいえぬ不安感が胸の内に広がる。

森は、城が見え隠れするあたりまでは、アリシアを優しく誘うかの如く、穏やかな様子を呈していた。

けれど、奥深く分け入るにつれ、森の空気はよそよそしくなってきた。

森全体がアリシアの頭上にのしかかってくるかのような胸苦しさ。ここに棲むあらゆる動植物、精霊たちが『よそ者、よそ者』と、彼女を爪はじきしているふうだ。

この暗緑の世界に、ただ一人。

禁忌にふれた罪人の如く、うそ寒い孤独におののいて。

太古よりの悪夢が、自分を捕らえようとしている。

危険を回避する本能を、迂闊にも忘れた罰という口実をもって、彼らは復讐の機会を得た。

つかつかと彼らの領域に入り込んできた、このちっぴけな人類の一員を生贄に。

恐怖は妄想となってアリシアの脳に憑依し、その胸中をかき乱した。

「！」

真っ黒い大きなカラスが一羽、アリシアの鼻先をかすめ、だしぬけに近くの枝から飛び立った。

その羽ばたきと枝葉のざわめきが彼女を脅かした。

手綱をさばく手がとまったので、馬も停止した。

まだ揺れ続ける枝を眺めながら、彼女は自らの体毛が一本ずつ逆立ってゆくのを自覚した。

神経が、うぶ毛の末端にまでピンと張り詰める。

「王子さま、いずこにおられます？」

たまりかねてアリシアは呼ばわった。

弱々しく語尾が震えるガラス細工のような声は木々が吸い込んでいった。

こだまの精が意地悪をしているのだろうか、アリシアの声はあまりにも力なく、なんの反響も余韻も残さずに消えた。

「王子さま、イーダス王子さま！」

あはははははは……。

アリシアの耳に、女の笑い声が届いた。

森の奥深くから、いや、すぐ傍から？

それとも、頭の中からか。

長く尾を引く、狂気を帯びた高笑い。

悪意のこもった、冷たいトーン。

馬上にあることを失念し、思わず彼女は身をよじり、バランスを崩した。

手綱を持つ手に余計な力が入り、咄嗟にそれを引いてしまう。

栗毛馬はいなないて前足をあげた。

「きゃあっ！」

悲鳴とともにアリシアは馬の背から滑り落ちた。

彼女は馬の背の片側に両足を揃えて、横乗りをしていたため、両足で着地できたけれど、彼女のか弱い足首は、落馬の衝撃には耐えられず、ほっそりとしたその肢体を地面に打ちつけるのを防ぐことはできなかった。

「ま、待って……お願い」

息がつまった胸を片手でおさえ、もう一方の手を前にのばして、走り去る馬の後姿にアリシアは虚しく、つぶやいた。

馬はアリシアの懇願を無視した。

アリシアはのびした手を引っ込め、上体を曲げて咳き込んだ。

地面に横になったまま、呼吸と鼓動が落ち着くのを、しばらく待つ。

その後で、軽く身じろぎを試みた。

「うっ！」

左足首が猛烈に痛む。

一旦苦痛を自覚した以上、気づかなかった時のように振舞うことは叶わない。

じんじんする足首を庇いながら、手近の木の根元まで這いずつてゆき、その木に背中をもたせかけ、ようやく彼女は落ち着いて周囲を見渡す余裕を取り戻した。

……今の自分の、無様な格好。

だらしなく両足を投げ出して、サテンのドレスは埃だらけの土まみれ。

髪はぼさばさで木にもたれかかり、足が痛くて立ち上がることも

出来はしない。

……くす、と笑いがもれた。

あんまりみじめで、最悪すぎて、彼女は破れかぶれの失笑をもら
したのだ。

こうなると却って、度胸がすわってしまった。

くすくすくす。

肩をゆすって笑い出す。

身じろぎをすると左足首に響いた。

だから長いことそうしてはいられなかった。

「……………」

静かだ。

つい先刻までの、胸中をかき乱す恐怖感は消えていた。

森の空気はもう彼女を嘲ってはいないようだ。

ただ、もの珍しげな好奇のまなざしを向けられている最中の、む
ずむずする居心地の悪さは残っていたけれど、それとて大して不快
には感じなかった。

葉陰で小人が、彼女の存在を怪しんでもいるのだろうか。

足首の痛みをまぎらわそうという思惑もあって、おもむろに彼女
は歌い始めた。

『いつかきつと どこかで会ったことがあるわ

だってとても なつかしい瞳をしてる……』

透明で癖のない、洗練された叙情的ソプラノ。

正確な技巧、存外に豊かな歌唱力、この清らかな愛の再生を主題
とした歌は、アリシアの繊細な声質によって、つかのまではあれど、
総天然色の命を与えられた。

『夏の光 踊る水 秋の澄んだ空
凍てつく冬の星座 春の陽だまり
美しい四季のなか あなたが微笑む
暖かいまなざしを おぼえているの』

突然に巻き起こる風 水面を乱して吹き抜けた
惑わされ 不意をつかれて 見失った幸せなとき
沈む夕日をとめられなくて 枯れる花をとめられなくて
欠ける月 砕け散る星 崩れてゆく幸せなとき
ひとりきり抱いているには あまりにも素晴らしすぎて
苦しくて やりきれなくて 手放した幸せなとき

いつかきつと どこかで会ったことがあるわ
だってとても なつかしい瞳をしてる
あなたはわたしの鳩 魂の鏡
銀の泉 金の麦 永遠の楽園
夏の光 踊る水 秋の澄んだ空
凍てつく冬の星座 春の陽だまり……』

歌詞の世界に陶醉していたアリシアを、ゆったりとした歩調のひづめの音が現世に引き戻した。
栗毛馬が引き返してきてくれたのだろうか？
親しい生き物が近づいてくる気配……その方向に、期待に満ちたまなざしを送る。

木陰から出現した馬は、栗毛ではなかった。

彼女が連れ出した馬よりも、はるかに立派な、白馬。

「どうしてきみが、ここにいるんだ」

信じられないと言った顔つきで、馬上のイーダス王子がつぶやく。
たぶん同様の表情を、アリシアは自分も見せているだろうと思っ
た。

あたかも森が、歌の褒美に意地悪をやめて、イーダス王子を自分
の前に導いてくれたかのような錯覚に陥ったのだ。

「そんな泣きそうな顔をするな、もうタイはやらないぞ!」

イーダス王子は自分が今しめているタイに手をやって、うるたえ
た様子でこう言った。

「あ……自分ので……」

アリシアは胸もとからレースのハンカチを取り出し、それで目頭
をおさえた。

「そうでしたわ、これを」

昨日借りたイーダスの白いタイを差し出す。

タイは丁寧にしわを伸ばされ、几帳面にたたまれていた。

「昨日は大変失礼をいたしました。わたくし、すっかり取り乱して
しまつて……お詫びの言葉をそえてこちらをお返ししたくて、散策
のお邪魔にあがりましたの」

「今日もすっかり取り乱しているようだな。王族の前で座りっぱな
しとは、いい態度だ」

「これは、わたくしとしたことが……!」

「そのままでもいい! それよりぼくの質問に答えたまえ。落馬か?」

「……はい」

アリシアは唇をかみ、うなだれて髪に手をやった。
土埃に薄汚れた、この姿……イーダス王子には、一目見た瞬間から、察しがついていたのに違いなかった。

『……恥ずかしい。消えてしまいたい』

「どこか痛めたのか、足か？」

アリシアの動揺を意に介さず、イーダスは馬から降りながら問いかけ、アリシアの傍らに歩み寄った。

「い、いえ、あの」

「正直に言いたまえ」

アリシアの傍らに、ひざまずくイーダス。

底無し沼の色をした瞳が、アリシアを射た。

「……左の、足首をちよつと、捻ってしまつて……」

細い声が、ますます細くなる。

「どら」

イーダスの手がアリシアのドレスの裾にかかった。

アリシアは真っ赤になつて裾をおさえた。

無駄な抵抗だった。

「なにも手当てしてないじゃないか。何故、馬を探しに行かせる前に、供の者に応急処置をしてもらなかつたのだ」

イーダスは、アリシアに連れがいると思ひ込んでいたらしい。当然だろう。

アリシアは口ごもりながら、真実を告げた。

「いいえ、供はおりません……」

「なんだつて？」

「……わたくし、一人で……」

「なんということを！ たった一人でこんな森の奥まで？ 貴婦人のすることではないぞ！」

「申し訳……」

「それで、馬は？」

また涙ぐみそうになったアリシアの言葉を遮って、イーダスは事務的に訊ねた。

「逃げたきりか……どちらへ向かった？ 毛色は？ 牝馬か？」

イーダスの質問へ、言葉少なに答えるアリシア。

彼女から必要な情報を引き出すと、イーダスは自らの白馬を撫でながら、頼りになる相棒に接するときの気安さで彼に語りかける。

「おまえの友達を探しておいで、プランセット。すてきな栗毛の美人だそうだ。ここへ連れてくるんだ、わかったな……お行き！」

白馬の尻をぴしゃりと叩く。

プランセットは主人の言いつけに、ただちに従った。

「すぐ戻る。きみは靴下を脱いで、足を出しておきたまえ」
てきぱきと指示を下しながら、王子は木陰に消え去った。

「……は？」

アリシアは、呆氣にとられて、その後姿を見送った。

と、木陰に消えたはずのイーダスが、顔だけ出して怒鳴った。

「早くしたまえ！ それともぼくに手伝わせる気か？」

二度まばたきをした後、アリシアは慌てて行動を起こした。

イーダス王子は、ほどなく戻ってきた。

たった今受け取ったばかりのタイに、たっぷり冷水を含ませて、それを、赤く腫れて熱を持ったアリシアの左足首に巻きつける。

「結局、また取られてしまったな」

「すみません……」

「……別に、いいさ」

少々乱暴に、薄緑色のドレスの裾と繊細なレースの海であるペチコートを、いっぺんに引き下ろしてアリシアの華奢な足首を隠すと、王子は立ち上がって、彼女の前を、爪を噛みながら、苛々と二往復した。

「……遅いな、プランセットの奴」

うろつきながら、手近の小枝を苛立ちまぎれに手折り、アリシアの正面の木に、どかっと腰をおろす。

間が持たないでいるらかった。

それはアリシアも同様だった。

「お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「何をだ」

「わたくしで何人目でしたの？ 妃候補にお会いになりましたのは」

「……わりと図太い神経してるな」

アリシアは青くなって口に手をやった。

「いい、いちいち謝るな、きみで三人目だよ」

機先を制して、イーダスが答える。

謝罪を差し挟む余地を与えまいと、さらに言い募る。

「一人目はえらく高慢ちきな女だった。名門の出だか知らんが『わたくし、家名の犠牲になる気はございません。意に染まぬ結婚を強いられる位なら、神にこの身を捧げとうございます』開口一番、こう来たよ。ぼくは彼女の願いを叶えてやった。いやみな女で、ギスギスしてて、体中にトゲがはえてるみたいだった。だけど冷静で、おのれの主張をはっきり述べてくれただけ、二人目の女よりはましだった」

王子は苦笑い。

「二人目の女は、ぼくを見るなり泣き出したのさ。この世の終わりを嘆くような号泣だった。『ああ、神様！』彼女の口から聞き取れた言葉は、これだけだったよ。侍従が飛んできて、ぼくは叱られたなにもしていないのに。ただこの姿を見せたただけだ、この……」

彼は言い淀み、宙に視線をさまよわせた。

「……ぼくはそんなに、醜いかな」

「いいえ、決して」

アリシアは即座にこう答えた。

王子の視線が焦点を取り戻し、アリシアを正面から見据えても、目を逸らさなかった。

「きみは本当に変わってる。これまで人からそう言われたことは？」

アリシアは曖昧な笑みを見せた。

王子は、笑わなかった。

「あの二人の反応は納得できる。むしろ不可解なのは、きみだ。何故そんなにぼくに執着する？ 家名の誉れになりたいのだったら昨日、兄に身をまかせていた方がどれほど得策だったか知れやしないのに……だが、きみはそうしなかった。おまけに今日は今日で、こ

んな無謀なことをする……何故なのだ？」

「おわかりになりませんか？」

「ああ、わからないね」

あなたに魅かれてるからです。

家のためでなく、ただ、わたくし自身の気持として。

今日ここに来たのだって、あなたに関心があったからです。

あなたを知りたかった。

あなたを包んでいる、この森の空気の中に、わたくしも身を置いてみたかった。

あなたと同じものを見て、聞いて、触れて、感じてみたかったです。

もう一度、重ねて訊ねられたなら、迷わずこう申し述べようとアリシアは決意していた。

けれどイーダスは、口をつぐんだままだ。

彼は彼女の唇から、決定的な言葉が飛び出すのを、じつは望んでいないのだった。

どう対処してよいものやら、それこそさっぱりわからなかったからだ。

「……遅いな、プランセットの奴」

彼は話題を変えにかかった。

似合いもしない冷笑を片頬に浮かべて、わざと意地悪く訊ねた。

「後悔しているだろう、森に来たことを」

「あら、どうしてですか？」

作りものの表情は、すぐに消えた。

「どうしてって……決まっているではないか、落馬はするし、足は痛めるし」

「でも、王子さまに助けていただけましたもの」

花がほころぶような、微笑。

「……ふん」

イーダスは、自分が眩しげに目を細めたのを相手に気づかれたくなくて、鼻息も荒く、そっぽを向いた。

アリシアは改めて辺りを見回しながら、うつとりと独白しはじめた。

「不思議な心地がいたします。森の中に、こうしていると。うまく言い表せないのですけれど、なにか自分が、とるに足りない小さな存在に思えてきて……頼りなくて、はかなくて、でも、生きている……生かされているって、こんなに実感できたことは、かつて、なかったように存じます」

「ここには嘘がないからな」

きっぱりとしたイーダスの口調。

アリシアの瞳は彼に戻った。

彼はアリシアを見てはいなかった。

先刻までのアリシアと同様に、みずからの思考を森に溶かし込んでいるのだった。

「いろんなモノが棲んでいる。いろんなことが起こる。こちらにとつて有難いことも、そうでないことも、いろいろだ。けれど嘘は、ひとつもない。ここにあるのは、真実だけだ。美しさも、恐ろしさも、醜さも、みんな本物だ。嘘は、ひとつもない」

王子の表情は誇りに満ち、その声には強い自信が。

深緑の両眼に清冽な光が宿り、赤い巻き毛が木漏れ日を照らし返してきらきらと輝く。

足さえ痛めてなかったら。

アリシアは彼にふるいついていたかもしれない。

オオカミ。

誇り高い、オオカミよ。

崇高なる自然に敬意を抱き、森の掟を尊び、独自の哲学を胸に秘め、生気に満ちた野生の獣。

ここであなは、まぎれもない王者。

……けれど、イーダス王子さま。

あちら側、虚飾にまみれた人間社会の内にも、真実はありますのよ。

たとえば、あなたのお兄様スーブラックさまのご本心。

そして、たとえば、わたくしのこの心情。

見えにくく複雑に歪められているけれども、真実はたしかに、あるのです。

この森のなかにいるのと同じくらい自然に、自由に、あちらの世界であなたが振舞えるようになったなら、どんなに素敵でしょう。

長い間、偏見に圧しつぶされてきたあなたの自我を、この手で癒してさしあげたいわ。

……でも、焦ってはいけない。

まず、他ならぬわたくし自身が、この方のほうへ、もっと近づいてゆかなくては。

「やっと、帰ってきたようだ」

イーダスが活気づいた立ち上がった。

アリシアの思考は中断された。

早足のひづめの音が近づいてきた。

ほどなく王子の白馬が姿を現し、栗毛馬の手綱を咥えて駆け寄っ

てきた。

「よし、よくやった。えらいぞ、プランセット」

白馬の首や胴を叩いて、なだめてやる。

馬はまだ荒い息を吐きながらも、褒めてもらって、いかにも嬉し
げ。

アリシアはプランセットに、少しばかり嫉妬した。

馬にやきもちをやくなんて。

こんなにも急速に、これほどまで深く、この方を好きになるなん
て。

彼女の予感は的中した。

養父の鎖を逃れても、また新たな鎖につながれるだけだ、とい
う。

しかしこの新たな鎖は、なんと甘美に彼女の首に巻きついてく
るのだろう。

なんと切なく彼女のむねをしめつけるのだろう。

彼女は生まれて初めて、運命に感謝の念を抱いた。

「やっぱり……腹帯が緩んでいたんだ。ちょっとバランスを崩した
だけで、落馬するはずだよ」

アリシアは我に返って王子を見た。

彼は栗毛馬の腹に手をやって、帯の具合を調べていた。

「……初めて自分で装着したものですから……」

アリシアは軽く弁解を試みた。

「まったく、無茶なお姫さまだ。ところで、立てそうか？」

イーダスの手を借りて、アリシアは挑戦した。

木に寄りかかりながらも、どうにか立ち上がることができた。

「その様子では、自力で馬に乗るのは無理みたいだな。プリンセツト、おいで、ここに、ひざまずくんた」

白馬は王子の命令に、忠実に従った。

アリシアは感心して言った。

「まあ、よく言うことをききますのね。ひとの言葉を解すんですの？ 彼は」

「ぼくの言うことだけはね」

間近で見る王子の目はいたずらっぽく、いくらか得意げだった。

『あら、王子さまって、鼻の頭にそばかすがあるのだね、それに笑うと意外に人懐こい感じになる』

ふわりと、アリシアは抱えあげられ、ひざまずいた白馬の背に腰かけさせられた。

『……線が細いわりには、力もある』

王子について新発見をする度、アリシアの胸の内で幸福感が増していく。

花火が、打ちあがるように。

「彼を立ち上がらせる。少し揺れるから、しっかりつかまっているように」

こう警告してくれる王子、さりげない気配りが嬉しくてたまらない。

自分でも制御できないほどに、アリシアの心は彼へと傾いてゆく。

そう、アリシアを乗せた白馬と、もう一頭の栗毛馬を引いて、一歩一歩、森の出口へと向かう彼の背中を見ているだけで、アリシアの内面はのどがつまりそうなくらい愛情でいっぱいになり、好意の波が洪水となって、外にあふれ出てしまっそうだ。

「わたくし、またここに来ててもよろしいでしょうか？」

王子の後姿に、問いかける。

「駄目だ」

王子の返事は、冷たかった。
が、すぐにこう言い継いだ。

「ひとりで来るつもりなら、許可できない。本当に、どうしても来たいのだったら、ばくに言いたまえ、連れてきてやるから」

イーダスの声は照れのためか、ことさら、つつけんどんであったが、アリシアのおもては喜びに輝いた……後光がさして見えるほどに。

陽光の暖かさに魅かれる植物のように、イーダスはその時、アリシアを振り返って見上げた。

彼は前進するのも失念して、瞬間、アリシアに見とれた。

「いつでも？」

微笑を崩さず、アリシアが訊ねる。

「あ、ああ」

自分がどもったことに対して、イーダスは腹を立てた。

「では、明日」

イーダスの動揺をよそに、馬上の男爵令嬢は大胆に宣言した。

「明日？ その足でか？」

「だって、申し上げればいつでも連れてきてくださると、たった今おっしゃいましたわ」

イーダスは絶句して、馬上で微笑む、たおやかな貴婦人を、さらにまじまじと見つめ返した。

「……わかったよ。明日だな」

ついに王子は根負けした。

前進を再開しながら、こうつぶやいたのだ。

やりこめられたのに、不思議と彼は、みずからの頬がゆるむのを抑えることができなかった。

それを感じられるのをおそれて、イーダスはアリシアに背を向けたのだった。

アリシアはすっかりはしゃいで、頬を紅潮させ、一気にまくしたてた。

「うれしい！　きっとですわよ。明日、晴れたら、わたくし、いろんな物をバスケットにつめて持ってまいりますわ。ローストチキンにサラダにチーズ……ワインは白と赤と、どちらがよろしいでしょう？　あとマフィンと、ビスケットと……王子さま、カシューナッツは好き？」

「なんだよ、ピクニックのつもりか？」

うんざりしたふうを装って、ちらりとイーダスが振り返る。

「でも、持ってまいります、明日、晴れたら、きっと」

彼女の笑顔は、王子が振り向くたび自身に満ちた美しさを増していくようだ。

イーダスは顔を正面に向けて、つぶやいた。
ひとりごとめいた、口調で。

「……カシューナッツ入りのチョコレートは、大好物だ」

アリシアはベッドに入る前に、明日のための総点検をおこなった。バスケットを開けて、中ものをひとつひとつ取り出しては、また、もとに戻す。

縁に青い小花模様を散らした小皿が六枚、おそろいのボウルが二個、銀の杯がふたつ、赤ワインの小瓶一本、大きなナプキンがふたつと、小さいナプキンが四枚。

あとはくれぐれもと厨房に頼み込んだ食糧を、明朝受け取って詰めるだけだ。

そのメニューを書き込んだ紙を、よく読み返し、ナプキンの上に置く。

高価なオルゴールでも扱うように慎重な手つきでバスケットのふたを閉じると、彼女はいきおいよく立ち上がり、白いシルクの寝巻きの裾をひるがえして、部屋の隅に置かれている花瓶に、少しびっこを引きながら近づいた。

オールラウンドに活けられた、とりどりの花々の中から、とりわけ美しく咲き誇る黄薔薇を二輪とりだすと、それを大事に捧げもち、バルコニーへ。

ちよつとした儀式をとりおこなうのだ。

いわゆる、晴れ乞いだ。

これは、彼女が九歳の時に出会った女性家庭教師に教わったものだ。

その女性はアリシアがただ一人、心を許し、尊敬できた先生だった。

まだ若く、高い理想と繊細な心配りと気品に満ち、アリシアの人

格を尊重してくれ、アリシアの言葉やしぐさに注意を払い、つねに真摯に対応してくれた。

型にはめようとはかりする他の教師たちとは明らかに異なっていた。

教え子というより、妹のように可愛がってくれた。

アリシアも彼女を姉のように慕い、とてもなついていた。

しかし、大好きなその女教師と過ごした楽しい時間は、それほど長くは続かなかった。

養父バロツサ・カノーラが早々に彼女を辞めさせたのだ。

彼女があまりにも情緒過多で、養父の教育方針に反するという理由のもとに。

アリシアは、この女性の思い出を大切に胸に秘めていた。

先生の笑顔、涼やかな声、慈しみに満ちたまなざし、そして、交わした会話のひとつひとつ、彼女が教えてくれた知識のすべてを、細部までも脳裏に甦らせることができた。

うす曇りの、ある昼下がり。

二人でミルクティを飲みクッキーをつまみながら、天気についての雑談を楽しんでいた時、姉とも慕うその先生は、ほんの座興にと、彼女の田舎に伝わる無邪気な儀式の数々を話してくれたのだった。

その時に先生が着ていたドレス、椅子に腰かけているためにスカーフトにできた、幾重にも折り重なる波模様、つつましかで上品な食器の扱い、優雅な所作、罪のない呪文を口にする際の、子供っぽい誇りをちらりとのぞかせる瞳……紅茶の湯気、菓子の甘い香り、心通い合う人との他愛ない軽妙な言葉のやりとり、和やかな空気、耳に心地よい先生のやわらかい声……そう、なにもかも、昨日のことのように、瞼の裏に再現できる。

幸福な思い出は数えるほどしかない。

その数少ない思い出を、アリシアは大切に大切に、心の内で反芻するのが癖だった。

だからいつまでも忘れないのだ。

バルコニーにひざまずき、二輪の黄薔薇に接吻した後、そつと下に置く。

胸の前で両手を組み、目を閉じて、心をこめて祈りの言葉を口にする。

「月の女神ジョアンナさま、どうかあなたの夫である太陽神におとりなし下さい。天を司るお二方のために黄金の花二輪と心からの祈りを捧げます。このわたくしのために、どうかあなたの夫、偉大なる太陽神に、明日は必ず、お顔を見せて下さいますよう……」

熱心に祈りを繰り返した後、静かにその場を立ち去る。

バルコニーの扉は閉めないでおいた。

それが月の女神ジョアンナに対する礼儀だから。

寝台の傍らに佇むと、燭台置きを兼ねたチェストの上にたたんで置いてある、イーダス王子の白いタイに、そつと右手でふれてみた。これは、帰城してからアリシアが自らの手でもみ洗いし、シワのばしを施したもの。

アリシアの片頬に、えくぼが浮かんだ。

彼女は、少々はしたないくらいの元気さで、レース飾りのついた掛け布団をはねのけた。

はずみをつけてシーツのうえに身を躍らせる。

足首の捻挫など、もはや気にならない。

スプリングの効いたベッドが彼女の身体を何度か宙に舞い上から

せた。

アリシアは笑い声をもらした。
自分が別人になったようだ。

……別人？ いいえ！

本当の自分を取り戻した気分。

あの方のために生きると決めた瞬間から、わたくしはきっと新しく生まれ変わったのかわ。

あの方を支え、寄り添い、足りない部分を互いに補い合って、ともに成長してゆけたなら……これほどの幸福が、他にあるだろうか。

わたくしは日に日に美しくなれる。強くなれる。

あの方によつて、あの方のために……そう、ただ、王子さまのお傍にいられたら！

チェストの上に手をのばし、王子のタイを取り上げる。

一旦それを大事そうに胸に押し当てると、そつと枕の下に忍ばせた。

片手は枕の下、タイの上に添えたまま、アリシアは目を閉じた。
爽やかに晴れ渡った明日の空を思い浮かべながら、彼女は安らかな眠りについた。

アリシアの願いは、聞き届けられなかった。

翌日は、雨だった。

イーダスは一人、愛馬の背にまたがり、昨日アリシアと言葉を交わした木立の中で肩を濡らしていた。

アリシアにとって、晴れた明日は、もう永久にやって来ないのだった。

朝、侍女が発見した時にはもう、彼女は冷たくなっていた。

左手首に蛇の噛み傷が見つかった。

閉め忘れたバルコニーの扉から侵入してきたようだった。

アリシアは王子のタイを枕の下で握りしめたままだった。

死後硬直のため、彼女からそのタイを奪い取れる者はいなかった。たとえ命を失おうとも、これだけは放すものかと、か弱い腕に力を込めているかに見えた。

イーダスは、タイを彼女の棺の内に、ともに納めることを承知した。

「……タイしか、あげられなかった……！」

イーダス王子は、空を仰いだ。

どんよりと重苦しい灰色の雲が立ち込めた、空を。

無数の冷たい針が、彼を目がけて降ってくる。

針は目にも口にも、容赦なく突き刺さってくる。

彼に関する忌まわしい噂が、またひとつ増えた。

森の王子に恋した乙女は、森の女神の怒りにふれる、と。

当の王子は、噂など齒牙にもかけなかった。

あとひとつくらい、ろくでもない秋分が加わるうが、今更どうと
いうこともなかった。

彼を打ちのめしているのは、人々の口さがなさではなく、針の雨
でもなく、あの風変わりな三人目の妃候補……内気そうに見えて、
時折ぎよっとするほど大胆な行動をとる清楚な男爵令嬢が、もはや
この世にはいないという、無常なる現実なのだった。

彼には以前、傷ついた小鳥を拾い、介抱してやり、やっと元気に
なったところで自然の猛威にさらわれてしまった、という苦い経験
があった。

今、胸をふさいでいるのは、まさしくその時と同じ、無念さ。

『泣き虫なのがたまにキズだが、あの笑顔は悪くない』
あんなふう慕われて、悪い気はしていなかったのに。
ぞんざいな態度ばかり取って。

彼女はぼくが、彼女をどう思っているか、ついに知らずに逝った
のだろう。

決して嫌ってはいなかった。

うまく表せなかったけれど、嫌いではなかったんだ。

「……アリシア」

名前さえ、まともに呼んでやらなかった。

イーダスは目を閉じた。

針の雨が目にしみて我慢できないせいだと自らに言い聞かせた。
頬をつたうのは雨だ。雨だ。雨だ。

イーダスは彼女を愛してはいなかった。
まだ、自覚するほどには。

ただ、彼女の笑顔は、もつと見たいと思っていた。

目を閉じたとして変わらぬ針の雨の攻撃に身をさらし続けながら、森の王子はアリシアの楽しいげな声を回想した。

『嬉しい、きつとですわよ！』

『明日、晴れたら……』

『王子さま、カシューナッツは好き？』

『明日、晴れたら……』

『明日、晴れたら……』

……その頃。

ノエルタリアは夢を見ていた。

はるか南方の異国の空の下、鉄の鎖につながれて。

バロッサ・カノーラの野望も、スーブラック・レムノスクの愛憎も、アリシア・カノーラの純情も、イーダスの苦悩も、一切かわりのない場所で。

ノエルタリアは、蛇の夢を、見ていた。

013 (後書き)

最後までおつきあいくださり、ありがとうございました(*^^*)

また別のお話もあつぷすると思いますので、今後とも、よろしくお
願いますm()m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9840i/>

ノエルタリア外伝/スリーピングスネーク

2010年10月8日22時49分発行